
ランニング・ハイ

瀬上夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランニング・ハイ

【Zコード】

N6402E

【作者名】

瀬上夕

【あらすじ】

ぼくが好きなのは、走ること。ただ、それだけで良かった筈なんだ。陸上部の期待のルーキーと先輩マネージャーのどこか不安定な日常。一人を変えるはある小さなウワサ。

(前書き)

はじめまして。瀬上タと申します。
拙い短編ですが、どうかよろしくお願いします。

「あと、いつしゅーう！」

声がした。今にも途切れてしまいそうな思考に鮮明に響いてくる声。

呼吸が喉に引っ掛かる。嗚咽が荒くせり上がりてくる。ふき出す汗が白地のユニフォームをぐっしょりと濡らした。

躯が、脚が、燃えるように熱い。熱い。熱い……。

一人、また一人と自分の横をすり抜けていく鮮やかなランニングシャツが、目にちらついた。色彩が煩い。

「かんちゃん！」

ぼくを呼ぶ声がする。

出発点から千五百メートル地点を示す白線が震んで見えた。

耳奥にこだまする金切り声。リアルだ。ぼくの上がる息と共に鳴し合い、頭に響く。

ぼくは、その声を頼りに、もつれる足を引きずつて白線の内側へと倒れ込んだ。

「はい、おつかれ」
ふつと花のような香がして、ぼくの目の前にタオルと飲み物が差し出される。

桜色のジャージをまとった紺野メグミが立っていた。彼女の顔を見るだけで、左胸が温くなる感じがした。

「ありがとうございます」と小さく礼を言って、それを受け取る。

「まだ上がらないの？ もうみんな更衣室行つりやつたけど」

男子更衣室に田を向けながら、彼女は言った。

「先輩は上がつちやつてぐださー。ぼくはもつ少し走るから」

「そつはいかないでしょ。あたしは、かんちゃんのマネさんなんだし」

かんちゃんのマネさん……。

紺野さんの何気ない一言に、めくつとした。

そういう一言がぼくをどれくらい惑わせるかつてこと、いい加減気づいてもらいたい。おかげでぼくの心臓が走り終わつたばつかりのときみたぐバクバクしてゐる。

ぼくは「紺野さんは……陸部のマネージャーですよ」と真つ赤になりながら言い返した。

紺野さんは曖昧に微笑んだまま何も言わない。しばりー一人で黙つていると、彼女は思い出したように手を打つた。

「さつきは坂井たちにずいぶんと離されちやつたね」

「うん」

「こつもはトップ集団に絡んでゐるの、めずらしこよね。本氣で走んなかつたの？」

「買いかぶりすぎですよ。ぼくは、坂井先輩たちについていくのも、いっぴいこつぱいなんです」

「相変わらず腰が低いわね。かんちゃんの実力は坂井だつて認めてるよ」

ぼくは、苦笑した。

「あたしがかんちゃんつて呼んだの、分かつた？」

面白そつに言つ紺野さんに、ぼくは困つたように顔をひそめる。

「……先輩、あの、人前でかんちゃんつて呼ぶのやめもらえませんか」

ぼくがそういつた瞬間、紺野さんの表情が一瞬凍りついた。思わず田を逸らす。

「どうして？」

「ほくらに変なウワサがたつてゐるのって、それが原因だと思つんで
す」

「変なウワサってなに?」

紺野さんだって知らないはずなのに、わざわざ内容をほくの口
から言ひようこうながした。

意地悪なヒトだ。いつも思ひ。

綺麗な顔をして、花の香を纏つて、いつだつてほくの欲しい言葉
をくれる。だけど、肝心なところほくを見ていない。

とんでもなく、魔性の女。

紺野さんは真剣そのものの顔をしていた。ほくは、じくつと睡を
飲み下す。

「だから、その……」

「うん」

「怒らないでくださいよ」

「怒らないよ」

「ほんとに?」

「絶対に。このデータ表にかけて、誓つ

「データ表つてそんなに効力なさそうんですけど」

「あら。あたしにとつては効果アリアリなんだけどな。なにしろみ
んなの汗と努力の結果がつまつてるんだから」

紺野さんがにっこり笑つた。

「それじゃ、言いますけど……ほくたちが、その、付き合ひてる
んじやないかって」

ひばりが鳴いた、気がする。ほくは恐る恐る紺野さんの顔色を
伺つた。

だけど紺野さんは顔になんの表情も浮かべていない。怖いくらい
の無表情だった。

もちろん、ぼく達の間にそのような関係はこれまで存在しな
い。実際は、先輩と後輩、もしくはマネージャーと部員。それだけ
の間柄だ。

やつぱり、怒ったかな。

心配になつたぼくは、ハハハと思わず乾いた笑いを零していた。

「な、なんでそんなるんでしょ、ね。ぼくと紺野さんがそんな風に見えるはずないのに」

「あたしが、かんちゃんつて呼ぶからなんじょ」

ぴしゃりと言い返された。ぼくは情けないくらいまじついて「そ、そつか」と答えることしか出来なかつた。

紺野さんは、そのまま暫く押し黙つた。彼女の横顔が小さく揺れる。長いまつげが、パチパチと交差する。

紺野さんはいつの間にか「陸上部のマネージャー」の顔から、「紺野メグミ」の顔になつていた。

ぼくの心臓が小さく鼓動を刻み始める。花の香がきつくなつた。

「イヤだつた?」

長い沈黙を破つたのは彼女の方だつた。

「は?」

「あたしとウワサになつて、かんちゃんイヤだつた?」

紺野さんが真つ直ぐにこっちを見て、訊いた。ぼくは、目を伏せる。

「紺野さんこそ、こんな後輩とウワサになつたりして、迷惑……ですよね。先輩には、坂井先輩っていう人がいるんですけどもんね」
言葉を待つたけど、彼女は何にも答えなかつた。ただ、小さく肩を揺らしただけ。

自分で言つてて虚しくなつてきた。

彼女には、ぼくの傍らでもう一人、お似合いだつて言われてる人がいる。陸上部部長で、ぼくと同じ長距離走者、部内エースの、坂井カナメ。

長身、美形。性格もよくて、部員にも慕われてる。ぼくも坂井先輩にあこがれて、種田を長距離に決めた。

そんな人には、ぼくなんかが太刀打ちできるわけもなく。ただ、仲のよい二人を遠くから見ているだけで、一年過ごした。

だから、不思議でたまらないのだ。坂井先輩ならともかく、どうしてこんな冴えないぼくと陸部のマドンナとの間に「付き合つてゐる」などというウワサが生じたのか。

ぼくの態度は、そんなにわかりやすかつたのだろうか。

「ねえ、かんちゃん」

ふいに紺野さんが言った。顔を向ける。

「はい」

「あのわ」

「はい」

「付き合つちやおつか」

「はい……えつ」

予想していなかつた爆弾に、ぼくは田玉をひんむいて、大きく後ろにのげぞつた。

「い、今なんて？」

声を裏返して、たずねる。聞き間違いだと思つた。

「あたしたち、付き合つちやおつか。ウワサじやなくて事実にするの」

紺野さんはあくまで冷静だつた。ぼくはといふと、驚きすぎて金魚みたいに酸素を求めて口をパクパクやつていた。うまく呼吸ができない。

「イヤ？」

イヤなんてこと、ない。絶対に、ない。

だけど、ぼくには言語障害があるみたいで、いまく言葉が口をついて出でくれない。

なんだよ、くそつ。言えよ。イヤじゃないって先輩に言えよ。イヤなんかじやない。イヤなんかじやない。イヤなんかじや……くすり。笑い声がした。顔あげてみると、紺野さんが笑つていた。口のはしをちらりとめくつただけの、ひどく大人びた表情だった。

「ほんと、クソ真面目なんだから」

紺野さんはぼくの横からすっと立ち上がり、小さく言った。

「今忘れていいからね」

「え？ あの」

「ほら、走るんだつたら早く走ってきなよ。あたしは今から着替えてくれるけど、更衣室閉めのは待つててあげるから」

「あ、はー」

「じゃあ、頑張ってね。神田くん」

せつしつが西や、紺野さんはぼくに背を向けて歩き出す。その後姿は、もう「陸上部マネージャー」であつて、最後の言葉はひどく冷たい響きだった。

ぼくは、ゆっくりとトライックを回しながらじめた。

紺野さんがぼくを「神田くん」と呼ぶようになったて、氣づいた事がある。

ぼくは彼女に、かんちゃん呼ばれるのを、実はなぜか苦に思つていなかつたといつ事。むしろ彼女にせつ呼ばれる事で優越感にひたつていた事。

後悔先に立たず。あれから、一週間ほど経った今も、ぼくは「神

田くん」だった。

他の部員に「紺野先輩と何があつたか」「どうどう破局かよ」などと騒がれたけど、検討違いもいいところである。

そもそも、ぼくと紺野さんにはなにもないんだから。

さらに腹立たしいのは、ペシャんこにへこんでいるぼくと対照的に、紺野さんにはあの余話を気にしている様子が全くない事だ。呼び方こそ変わったものの、先輩はいつもどちら話しかけてくる。

所詮ぼくは彼女にとつてそれほどの存在なのかと、悲しいやう、悔しいやうで、この一週間の部活中は少くともほんの一回ばかりの、ぼく。

「神田」

そして、ふやけたぼくは、当然のことながら部長からのお叱りを受けていた。

「なんだよ、このタイム」

「……すいません」

「すいませんじゃなくつてさ。大会近いんだが。わかってる?」

坂井先輩は、眉を思いつきり顰めながらデータ表を指で弾く。

「紺野も心配してたが」

その言葉を聞いた瞬間、ずしんと重たいものがぼくの胸の奥に降つてきた。

坂井先輩の口から紺野さんの名前を聞きたくなかった。

部長とマネージャーなんだから、接点が多いのは当たり前なの。唯一の部員のぼくんかよりずっと多いに決まっているのに。そんなの分かつてゐるのに。

心臓が痛い。ぼくはおかしいんだろうか。

「お前がそんなんだとこっちも調子でないんだ。長距離でおれと張り合えるお前くらいしかいないんだから」

「そんな、ぼくんて、全然です」

先輩は、大きくため息をついて、ぼくの頭をくしゃくしゃにしてた。

「謙虚なのはいいけどさ、弱気なのはどうとかじつけよ」

「すいません」

「それだよ、ソレ。すぐここに謝るのはアスリートとしてどうかと思つ

「ぜ」

「でも、スポーツマンシップは守ります」

ぼくが言い返すと、先輩は面食らつたよつて顔を張つたあと、もう一度息を吐いた。

「生意気が言えるんなら、もつと我慢言えよ」

「我慢……ですか」

「お前には貪欲さが足りないんだよ。もつと早くなりたいとか、勝ちたいとか、そういう気持ち。神田。お前はさ、本気で欲しいものつてないわけ？」

ぼくは、答えない。答えられない。

坂井先輩は言つこと言い終えると、トランクに戻つていった。長身の体が一度大きく揺れ、白線に向かい合つ。「よーい」と紺野さんによく通る声が響き渡る。次の瞬間、坂井先輩は、ピストルの音と共に地を蹴つていた。

美しい。なんて綺麗なんだろう。

人が走る姿ほどこの世で麗しいものはないんだけど、この人の走りを見て初めて知つた。入部したてのぼくが受けた衝撃は今でも健在だ。

坂井先輩にだけ憧れていられたら、どんなに良かつたか。きっと、走るのが大好きでしかたなかつた。少しでも先輩に追いつきたくて、部活が最高の楽しみになつっていた。

でも、ぼくは。

ぼくは、入部して違う「憧れ」を知つてしまつた。しかも、坂井先輩のオンナに対して。

こんな思いを知らなければ、劣等感に苛まれることもなかつたかも知れないのに。

本気で欲しいものつてないわけ？

ありますよ、ぼくにだつて。でも、それは全部あなたのモノだから。

「サイマーだ」

思わず呟いて、空を仰ぐ。空は皮肉にもからつと晴れ渡つていた。その時、ぼくの鼻腔にやわらかい花の香りが広がつた。ぎくりと身が固くなる。

「なにが最低なの？」

その声を聞いて、なぜか泣きそうになつた。桜色のジャージが目の前をちらちらする。

なんだよ。なんで、Jリーグ、タイミングよく現れるんだよ。狙つてるとしか思えない。

「……なんでもないですよ」

「あー、拗ねてる。かわいいなあ

「拗ねてなんか！」

勢いよく振り向くと、紺野さんがくすくすと笑っているところだつた。ぼくは、ますます不機嫌になる。

「隣、座るね」

座つていい？ と疑問形ではなく、断定的に言い切つたのが紺野さんらしい。宣言どおり彼女はぼくの隣に静かに腰をおろした。紺野さんは肩に落ちた髪をさらりと持ち上げて、耳にかけた。そんな何気ない行動でさえ、ぼくの全身は緊張で硬直する。

紺野さんは、何も言わない。ずっと黙つて居るのも不自然だから、ぼくは、仕方なくボソボソとしゃべりだした。

「……ふつう、メランコリーな男子は放つておくんですよ」

「うん。知つてゐる」

「知つてゐるな」

「でも、あたしは神田くんのマネだから」

紺野さんは顎を上げてぼくを見て、嬉しそうに目を細めた。こんな笑顔を見せられて、いつものぼくなら絶対恥ずかしいおかしくなつてゐる。

だけど、今日は胸が熱くならない。顔に熱が集まる感じがしない。腹の奥が、しんと静まり返り、かわりに寂しさとも悔しさともつかない、そんな気持ちが襲つてくる。

紺野さんは、一瞬でぼくから視線を逸らした。逸らす前に一度、瞬きをした。

「言わないんだね」

「え？」

「紺野さんは陸部のマネです、って。いつもならそう言つじやない

「……なんか今日は、そういう気分じゃない」

「勝手」

「紺野さんこんち」

蜻蛉が目の前を遮った。羽音が煩い。雲が太陽に被さつて、辺りが少し暗くなつた。

「さつきの氣にしてるの？」

「さつきの？」

「坂井に何か言われてたでしょ。欲しいものがどうとか

「ああ……」

「あいつもさ、期待してるんだよ、君に。坂井があんな風に後輩に言つうの初めてだし」

頬の筋肉が引き攣つたのが分かつた。口内で血の味がした。知らないうちに、唇を噛んでいた。強張つた頬を無理やり動かして会話を続ける。

「……よく見てるんですね。坂井先輩のこと」

紺野さんは答えない。いつも曖昧な笑みを浮かべて、細い肩を揺らしだけだった。うまくかわされた感じがして、思わずため息が出来る。

「気にしてるって言つうか……落ち込んでます」

「正直だね」

「こういうのカッコ悪いのはわかつてますよ」

「そんなことないわよ。自分のこと曝け出せるのは全然カッコ悪くなんかない」

ちりつと胸の奥で火が灯つた。痛いくらいに、熱い。強張つた頬に血が上る。ぼくは思わず目を伏せた。紅く染まつた顔を紺野さんに見られたくなかつた。

「……坂井先輩は、ぼくの憧れなんです」

気がついたら、胸の奥の火に煽られるように言葉がずるずると口をついて出ていた。次から次へと吹き出して、止まらない。

「仮入部で初めて坂井先輩を見たとき、感動つていうか、興奮つていうか、とにかくすごく刺激されたんです。先輩みたいになりたく

て当然のように長距離を選びました。でも、

声が掠れて喉に引っかかる。

「最近走るのほんとキツイくて。坂井先輩の背中見ながら走つてると、なんか……泣けてきます。何もかも持つてゐる人が眩し過ぎて、田が眩んで、「ホールが見えない」

俯き加減だつた顔を上げてみる。意外と近くにあつた紺野さんの視線とぶつかつた。

大きな田、反り返つた睫、さらさらの髪、艶やかな薄桃色の唇。細部にまで田が行く。

こんなに近くに居て、ぼくは紺野さんの田はじう映つてゐるんだろう。

お互いに暫く相手をじつと見ていた。結構、長い時間が経つたようを感じた。

ふつ。

突然、紺野さんが吹き出した。

「なーに言つての。ばっかだなあ」

からからと気持ちよく笑う。ぼくは、ただぼうっとその笑顔を見ていた。

「なに詩人気取つちやつてんのよ。ぜんつぜん似合つてないよ。そんなんのただの言い訳にしか聞こえない」

紺野さんの言葉は辛辣な筈なのに、なぜか心地よく耳に響いた。小さな鈴が鳴るように、リズム良く、ぼくの心臓と共に鳴る。だんだんとぼくの頭は桜色に侵食されていく。

「でも、ぼく作文とか得意ですよ」

何かを誤魔化すように憎まれ口を叩いてみたけれど、紺野さんの真つ直ぐな表情は変わらない。ぼくは覚悟を決めた。

「神田くん　　かんちゃん」

どくん、と心臓が高鳴つた。紺野さんはもつ笑つていなかつた。

「かんちゃん」

「はい」

「辞めないよね」

「は？」

「部活、辞めたりしないよね？」

顔を傾けて、ぼくを覗き込むように紺野さんが訊いた。彼女の目は行き場をなくした子供みたいに不安げで、今までぼくが見たことがないほど可愛らしかった。いつもの凛として、どちらかというと美人の部類に入る先輩からはとても想像できない。

思わず、笑つていた。

紺野さんはキョトンと目を丸くする。それがまた面白くて笑いが止まらない。

「ちよつと、なに。びりじたの」

紺野さんの一言一言がぼくの中を駆け巡る。ぜんぶきらきら輝いている。

この人を、どんなことであっても不安にさせちゃいけない。急にそんなことを思った。

「辞めませんよ」

「え？」

「坂井先輩に負けないくらい、好きですから」

「走るのが？」

「はい」

それから、貴女のこと。
「そつか

「はい」

「いえ」

「うん、そうだよね。ばかなこと聞こちやつた。『めぐ』

紺野さんは、何度も、何度も満足そうに頷いて立ち上がった。ぼくの手が引っ張られる。

「じゃあ、走る」

「へ？」

「好きなんでしょう。だつたら走らなきゃ」

「好きなんでしょう。だつたら走らなきゃ」

「え、ちょっと」

「ゴールなんてないんだよ、かんちゃん」

「はい？」

「五千メートル走りきったって、そこで終わりなわけじゃない。一万だって二万だって走ろうと思つたらいくらだつて先がある。だから、こんなトコで腐らないで」

繋がつた手から熱が伝わつてくる。

じんじん、じんじん。

ぼくは、走るのが好きだ。

坂井先輩が好きだ。

この土っぽいグラウンドが好きだ。

花の香が好きだ。

ぼくは 迷わず頷いていた。

「水分取った？」

「はい」

「テーピングは？」

「大丈夫です」

「それじゃあ、いきますか」

紺野さんの後ろをついてトラックに出る。

全体での反省も終わり、他の部員はもうみんな上がつていた。

グラウンドにいる生徒は三人。ぼくと、紺野さんと、そして坂井先輩。

制服に着替えた坂井先輩は顧問用のベンチに座つて、さつきからぼくと紺野さんことを黙つてじつと見ていた。

時折、坂井先輩がぼくのタイムが書かれた記録用紙に目を通して

いるのが分かつた。

傷心中のぼくは、自分で思つていた以上に、部長に心配をかけていたらしい。

「神田くん」

振り向く。紺野さんがストップウォッチを首にさげた。

「無理しないでね。夕方つて言つてもまだ気温高いし、今日熱中症で倒れちゃつた子多かつたじゃない。神田くんも」

「あの、紺野さん」

「うん?」

「取り消します。それ」

「え?」

「かんちゃんつて呼ばないでトさいつて言つたの、取り消します」紺野さんが目を見張つた。そして、くすりと笑つて、ぼくの眉間に小突いた。

「ほんと、勝手」

「すいません」

「でも、良かつた。あたしも、神田くんつて呼びにくくなつて、辺りが暗い分、真っ白なスタートラインが際立つ。そこに足を揃えて息を詰めた。久しぶりの高揚感に体が震える。

「そういえば」

ふと、紺野さんが言つた。ぼくの集中を妨げないようにしてこいつのか、控えめな咳きだつた。

「はい?」

「坂井が持つてなくて、かんちゃんが持つてるもの、知りたい?」

「あるんですか、そんなもの」

紺野さんは、にやつと含み笑いをする。

「あたし」

時間が、止まつた。風が、草が、土埃が、雲が、すべて止まつた。止まつたと思った。

視界の隅にいた坂井先輩が小さく身じろいだ気がした。

「なーんてね」

いたずらっぽく笑つた紺野さんは、細い指でカチカチとストップウォッチをいじつた。彼女の薄桃色の唇が笛を加える。白い歯が唇の間から、ちらりと覗いた。

今更になつて、ぼつと、ぼくの顔から火が噴き出した。頭が真つ白だ。こんなので集中なんて出来っこない。

心臓が狂つているみたいに早鐘を打つ。ぼくは必死で何か言おうとしたけれど、口からでた言葉は擬音語というか、ぜんぶ意味不明なものばかりだった。今まで使つてきた言葉を全部忘れてしまつたようだ。

「はっ、え……うひ、こんのわ……なつなに」

「ほら、何してんの。早く位置について。よーい」

紺野さんの右手が上がる。ぼくはあわてて白線に向き直つた。
ぼくの田の前にはトラックが続いている。集中できないと思つていたのに、ぼくの意識はもう白線の先に引き寄せられていた。
最初のコーナー、直線、そしてそのずっと先、一周したところにいるのは桜色のマネージャー。そのサイクルに終わりなんて、ない。
笛の音がした。

ぼくは、花の香りを肺に押し込めて、力一杯地面を蹴つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6402e/>

ランニング・ハイ

2010年10月8日15時14分発行